

大江健三郎さんの講演から

昨日レポートした大江健三郎『あいまいな日本の私』には、多くの講演が掲載されている。講演ということもあり、大江さんの言いたいことが読みとりやすい。1992年の「北欧で日本文化を語る」から、多くの示唆を得ることができたところを紹介したい。

沖縄は、日本化された表層のもとに、いまなお独自の文化を持ちこたえています。それは日本全土の文化の持っている、天皇制という中心を指向する性格、絶対性、閉鎖性とは別のものです。周縁の豊かさ、多様性を持ち、相対的な価値に意味をあたえる自由さをそなえ、外側に向かって開かれています。

私はこの沖縄文化を媒介に、自分の四国の森のなかの村の伝承に、韓国やアジア一般に向けて開かれ、結びついてゆく性格を確認しようとしました。(中略) 私は四国の森のなかの村、周縁の村から東京という中心に向けて出発し、そこでヨーロッパ文化をまなび、それによって開かれた眼で、沖縄文化を媒介に、自分の森のなかの村を再発見した、そこに、自分の文学を根づかしめた、といいうると思います。

いま壮年期の終わりにあって、私はこれまでの自分の作家生活をふりかえりながら、つねに自分がここにのべたふたつの長編小説の展開というかたちで仕事をしてきたことに気がつきます。現実の私の生活における経験でもあった、頭部に畸型を持つ子供の出生という出来事は、精神障害児である息子との共生という永い時間の幅を持つ主題にかたちをかえて、私のその後の小説世界に影をおとしてきました。

私は広島・長崎における原爆の体験と、核時代に生きることの意味について、一連の評論活動と、それにとまなういくらかの社会活動を行なってきましたが、その場合も、障害児と共生する人間の視点が私にとっての基本的なモチーフでした。家庭における、障害児が持っている「癒し」の力ということから、私は核時代の病んだ社会に対する、被爆者の「癒し」の力を考えるにいたりました。すくなくともいま広島・長崎で核兵器廃絶のために発言し、活動している被爆者たちに一かれらはすでに老年ですが一、社会全体あるいはこの惑星の人間全体に対する「癒し」への積極的なねがいを見てとらぬわけにはゆきません。

日本の周縁の村に、東京という中心から独立して、根本的にそれに対立しさえする独自の文化—それは宇宙観、再生の思想を軸とする死生観に根ざして、具体的な生活のスタイルに及ぶものですが—を再建しようという方向づけによって、私はいくつもの長編小説を書てきました。もとより現実には、四国の森のなかの村にも、中央の均質化された文化は強い力を発揮しているのです。むしろ私は現に日本の周縁を支配している中心文化に対して、神話や民族的慣習のレベルでの、その対立物を創造するかたちで抵抗するほかになく、そのモデル製作の過程が、ほかならぬ私の小説でもあるのです。

(2023年4月9日)